

# わたしのつましい仕事場に

日野笙子

わたしのつましい仕事場に  
小鳥の羽ばたきの音を立て  
子どもたちが駆けてくると  
そこだけほのかに  
浮き世離れた甘美な風が吹いた  
冬の陽だまりに佇む小鳥たちの記憶は  
初めての信仰を持つ者のためらいに似ている  
親に疎まれ続けた子のように  
なんだかこの世界の未来が  
危うい気がしてならなかったから  
年とった者の午後にさえ  
新しい陽射しはもう伸びきれずためらっているようだから  
人生が核心から離れてしまわないように  
それは祈りのような思いなのだ  
けれども子どもが春を呼ぶ声は  
離れていくほどに新鮮でなんだかとても痛いのだ  
ねえ たいへんなんだよ  
一心不乱な瞳の子どもが飛び込んでくる  
こんどはどうしたの  
数えきれぬほどの たいへんさ  
どうやらこの子の たいへんは  
いつも今にも消えてしまいそう  
ああ たいへん  
そうしてつぶらな瞳が笑うと  
わたしと子どもは

きつといつまでもたいへんでいたかったのだ

残された時間がこの子らのたいへんで

埋め尽くされてもいいとさえ一瞬思った

ねえ 聞いていい

なあに

きみたちは遊んでるのかなそれともいたずらに来たのかな

もしかしてお手伝いしてくれてるの

子どもは永遠を疑わずそして不意打ちのようにくくつと笑った

もうすぐがっこうだからそんなにあそんであげられないよ

夕暮れのわたしの仕事場に

たくさんの季節を吹き抜けた風が吹いた

どうやら春も間近らしい